第3日 11月5日（日） 10:00～12:00 5F 国際会議室501

S14 知覚と感性

－ 視覚と表現のリアリティー －

企画者	九州大学	三浦佳世
司会者	千葉大学	一川 誠
話題提供者	NTTコミュニケーション科学基礎研究所	本吉 勇
話題提供者	立命館大学	松田隆夫
話題提供者	九州大学	河邊隆寛 #
話題提供者	中央大学	山口真美
指定討論者	東京大学	佐藤隆夫
指定討論者	コーネル大学	J.E.Cutting #

概 要

古代ギリシャ語のアイステーシス（aisthesis）は、感覚から感情までを含む広義の「知覚」を意味する言葉であり、同時に、「感性」を意味する言葉でもあった。「美学（Aesthetics）」という言葉は、アイステーシスに関する認識、つまりは「感性の認識」を意味する語として作られたが、それはまた「知覚の学」をも意味していた。

実際、見ることは感じることの土台をなし、感じることは見ることを規定している。かつて、ゲシュタルト心理学では知覚の基礎に、「よさ」という感性評価の概念を置き、その定義の曖昧さに批判も受けたのだが、思えば、知覚と感性の関係、あるいは、知覚と分かちがたく行われる私たちの直観的評価判断の的確さを指摘していたのだとも言えよう。感性を、そうした「知」をも内包する無自覚的な高次情報処理として捉えるなら、無意識的推論を含め、現在の知覚・認知研究の主要な観点ともつながっていく。

ここでは「感性」を、必ずしも、よさや美しさ、あるいは違和感や不快感などの評価性に限局するのではなく、たとえば、質感や奥行き感、動き感などの印象として捉えてみよう。不透明な色のパッチがある配置で置かれたときに、美しい透明印象が生まれるが、この透明「感」は知覚なのだろうか？それとも、感性なのだろうか？アイステーシスとしての知覚からすれば、私たちは透明印象を伴った対象を、総体として知覚しているに他ならない。それでは、絵画において見事に表現された真珠の光沢感が、実際の真珠の反射特性と全く異なっていることについてはどうなのだろうか？あるいは、写真は真を写すと言うが、写真において距離感と距離知覚は常に対応関係を保っているわけではない。とすれば、知覚と感性は分離すべきなのだろうか？まして、静止画像の中に動き感や速度感を感じ取った場合、それが動いて見えないのであれば、知覚とは呼べないが、こうした刺激に対しても大脳の動きに反応するMT野は活性化することが知られている。MT野が反応しているのはアイステーシスとしての知覚なのだろうか？

このセッションでは、絵画や写真、漫画といった感性表現を出発点とし、そこに含まれる豊かな表象可能性を楽しみつつ、二次元画像における知覚と感性（印象）のメカニズムについて、発達の視点も含めて議論し、さらには、三次元の現実世界との違いについても考える契機にしたい。浮かび上がってくるのは、私達にとってのリアリティーとは何か、ということかもしれない。

質感知覚の心理学：絵画手がかりと画像統計学 本吉 勇

わたしたちは明るさや色のみならず金属の光沢や肌の透明感など豊かな質感を容易に見分けることができる。本論では、脳が画像のなかに含まれる手がかり（cues）を有効に用いて質感を推定している可能性を、西洋絵画技法との関係において示すとともに、一部の手がかりが低次の視覚機構で検出されることを画像統計解析と心理物理実験に基づいて証明する。

写真に表象される三次元性の空間 ―知覚と印象― 松田隆夫

私たちは写真面の被写対象像が実際空間の $x \cdot y \cdot z$ 軸方向でどのような距離にあるか知覚できる。他方、写真から受ける側方向の拡がり感・上下方向の伸張感・遠近方向の奥行き感などを印象評価できる。知覚や印象は撮影条件や観察条件によって影響されるが、今回は影響の現れ方が知覚と印象では異なり、空間内の方向性や印象の種類によっても異なることをデータに基づいて試論したい。

絵画における動きの表現と表象 河邊隆寛

アーティストは、動きを静止したキャンバスに封じ込めるために様々な手法を用いる。動きの表現から動きの表象が生じる仕組みを明らかにすることは心理学者の一つの課題であろう。本発表では、動きの表現を伴う物体の仮現運動知覚、および位置記憶を調べることで、動きの表現が「上手に」視覚情報処理を刺激していることを示す。

乳幼児の知覚と感性 山口真美

奥行きや動きや形やさまざまな質感のある世界を、私たちはいつどのようにして獲得してきたのだろう。また、それらの世界は、大人のもっているものと、どのように違うのだろう。最新の知覚発達研究を紹介しながら、我々の研究室が明らかにしてきた、相対運動、主観的輪郭、運動透明視、陰影からの奥行き知覚などのデータをもとに、乳児における知覚と感性の世界を考えていく。